

# 連載講座

第47回

## 雷は電気だ・橋本宗吉（上）

作家 童門冬二

### 江戸の天才学者

「雷はエレキテルだ」。橋本宗吉はそう思っている。エレキテルは電気のことだ。自分で発電機を作り、生んだ電気にそういうネーミングを与たのは平賀源内だ。源内は宗吉と同じ阿波（徳島県）の生れだ。才能が量り知れないので、

「天才的学者」

と呼ばれている。

宗吉は嬉しい。同郷人の成功を心から喜んでいいる。ただひとつだけ気に入らない。

源内が発電機を作ったのは、本来医療のためだった。おそらく業病に対するショック療法に使うつもりだったのだろう。源内はその普及のために諸所で実験をくり返した。

源内の操作で生産された電気は時に火花を飛ばした。観衆は驚き歓声をあげた。顔を見合わせ手を叩いた。

「まるで手品のようだ」

と声が飛び交う。

いまはその“手品のような機械”を観るためだけの催しが多くなった。残念なことに源内もそういう世間の受け止め方が満更でもない。源内自身がその風潮に乗っている。そういう人の好き、軽さが源内にはある。宗吉が認識している源内の発電機は、

「エレキテルは雷と同じ物だ」

ということを証明するための物だったはずだ。

それがいまは見世物になっている。

宗吉は誠実で几真面目な学者だ。宝暦13年（1763）年に生まれた後、成長するに従って記憶力のよさと奇妙な才能（科学的な勘）を発揮するので、

「この子は成人すればきっと大物になる」

と、タニマチスポンサーが何人も現れた。大坂の大商人間重富<sup>はざま</sup>は宗吉に最初に目をつけた人物だ。質倉を11も持ち、“十一屋”と屋号にしている敏腕な大坂商人だが、高名な天文学者・暦学者である麻田剛立の弟子でもあった。もう一人のスポンサーが京都の医師小石元俊である。杉田玄白の「解体新書」を読んで大いに触発された。何かのきっかけで間と会い宗吉が話題になった。

「日本での正当なオランダ学者を育てよう」

と合意し、たちまち宗吉にその意を伝えた。宗吉は喜んだ。真面目なかれは誠実に二人の期待に応えた。オランダ学の核だった大槻玄沢の門に入り、天文・暦学・医学まで広い範囲にわたる才能を発揮し、大坂に戻って恩人二人のよき助手になった。かれの名も高まった。

しかし、宗吉の頭の中に一つだけ未解決のテーマがあった。「雷は電気だ」ということの証明だ。何人かこの実験に取組んだ先人がいる。方法は大体同じだ。

- ・高い木の頂に落雷を受ける装置を置く
- ・落雷のパワーを保留する仕掛けを作る
- ・そのパワーを人体に伝える

この方法で成功し、自分の身体で雷を体感して衝撃にピリリと身を震わせた者も何人もいる。しかし前提とする説（「雷は電気だ」）は肯定されなかった。それは落雷を受け止める木の高さが低かったからである。高いといっても精々2、30メートルで、到底空の高さには及ばない。

「雷は高い空の中で生れる。その生産過程を明らかにしなければ、電気と同じ物かどうかわからない」

というのだ。

エレキテルといえはすぐ平賀源内の名が出るように、電気と源内の関係は密接だ。だから宗吉の<sup>ねが</sup>希いは、

「平賀さんがエレキテルと雷は同じだ。ということを実証してくれればいい」

ということだ。が、いまの源内はそのことから離れて、発電機を見世物にしている。無理もない。世間が求める。

「雷が生れる空の中の実態を示せ」

等ということは、たとえ源内の溢れるような才能をもってしても無理だ。空の中に人間が入りこむ等ということは、夢のまた夢だ。

## 宗吉のエレキテル観

宗吉はエレキテルについて次のような考えを発表している。

「エレキテルは天地の巨大な世界から、けし粒ほどの小さな世界に至るまで同じ理を通じていることを知らせるものだ。風雨、雷電、地震、流星などの天界の現象を、そのまま人間の手近な目のところで実現させ、試験できるものだ。ごく手近なところに、天地を写した小宇宙の動きを知ることが出来るのは、礼楽仁義道学の一助ともなるであろう」。

かれの書いた「阿蘭陀始制エレキテル究理源」の序文の一節だという。何が理由だったのか。不勉強な筆者はその探求の労を怠っていて申訳ない

が、著書の本体はついに出版の許可が出なかったという。

しかしこの序文だけで、宗吉が、

「エレキテルは火花を飛ばしたり、多くの人びとを感電させてショックを与え驚かせる。見世物的なおもちゃではなく、窮理学（主として物理学）的な自然科学の課題なのだ」

とうことを訴えていることは、痛い程わかる。宗吉の良心がそうさせるので、序文でさえ切ない。

そして“エレキテルの見世物的現象の例”は、宗吉自身も次のように書いている。

- ・紙人形を生命があるかのように踊らせる
- ・エレキテルが起す火の力で、蛙・ねずみ・雀などを気絶させることが出来る
- ・人間百余人の胆を潰させる

最後の例は次のような実験だ。

- ・百余人の人びとを一室に集め、手をつながせる
- ・ふすまのこっち側から手をつないだ人びとにエレキテルを送りこむ
- ・エレキテルはびっくりするような速度で、手をつなぐ百余人の身体を走り抜ける
- ・百余人はショックを受け、“百人おどし”だと驚きを語り合った。

宗吉にすれば、

「エレキテルの性格をよく知ってもらうための実験」

なのだが、この点だけについていえば、平賀源内とそれ程違わない。そしてこういう実験で人々に「エレキテルの性格」を伝えながらも、引っかかっている。

「雷も電気だ」

という断定はやはり簡単に得られなかった。

なぜ宗吉がそれほどこの問題にこだわるのか、私のような小物には雀と鷹のようなもので、宗吉の科学精神には及びもつかないが、宗吉は思いもしない事件にまきこまれる。それも歴史に記録される事件にだ。

(つづく)